

bunka@nagasaki-np.co.jp

日米友好深めたシドモア兄妹



長崎市中島川沿いに咲き誇る桜の花。大正期の絵はがき(筆者蔵)

Cherry of Nahagawa, Hotspring Nagasaki. 景の花櫻泉温ス、レカ郷川中市崎長

長崎居留地
ドキュメント
ブライアン・パークガフニ

31

米国領事と桜

アメリカ合衆国のジョージ・シドモア領事は、明治40(1907)年4月、妻と共に長崎に到着し、東山手12番地の長崎米国領事館に入居した。弁護士としての訓練を受けた彼は、明治9(1876)年から外交官として勤務し、最初はイギリスのリバプール、次に

スコットランドのダンファース・リン、フランスのパリを経て、横浜米国総領事館に派遣された。そこで日本語を学び、日本の文化や政治の勉強に没頭した。

シドモアの妹エリザも先駆的な作家・写真家・冒険家で、兄が横浜に赴任した翌年の明治18(1885)

「ワシントン植樹」を請願



アメリカのファーストレディとなったヘレン・シャウ女史(筆者蔵)

年に初めて来日。領事館のつながりを活用し、外国人旅行者が通常立ち入れない地域の情報収集に努め、数回の長崎訪問を含め日本各地を視察した。

これらの訪問中、彼女は桜の花の美しさに心奪われていた。明治24(1891)年にはベストセラー旅行記「日本・人力車旅情」を出版し、日本研究の権威としての地位を確立した。ナショナル・ジオグラフィック誌に頻繁に寄稿し、同誌初

のカラー写真の一部も提供。ナショナル・ジオグラフィック協会の理事に選出された初の女性ともなった。おそらく最もよく知られているのは、首都ワシントンD.C.のポトマック川沿いに日本の桜を植樹するよう米政府に度々請願した功績であろう。

ジョージ・シドモア領事が長崎で過ごした2年間の滞在におけるハイライトの一つは、陸軍長官でありアメリカ大統領候補でもあったウィリアム・H・タフトは、友人であるエリザ・シドモアの長年の悲願を遂行し、ワシントンのポトマック川河畔に東京から贈られた3千本余りのソメイヨシノを初めて植樹した。今日、これらの美しい日米友好の象徴は、毎年150万人以上の人々をアメリカの首都に引き寄せている。

(グラバー名誉園長)

月1回掲載します



ジョージ・シドモア領事(中央)とその妹エリザ(左)が母親と共に写真に納まっている。現在、3人とも横浜外国人墓地に永眠している(個人蔵)

たウィリアム・H・タフトとその夫人ヘレンが、軍関係者や政府職員の一団を伴って長崎を訪れたことである。東山手12番地の米国領事館で開催された歓迎宴会には、北川信従長崎市長をはじめとする日米両国の要人が列席した。昼食後、シドモア領事はタフト夫妻を大浦26番地のシーマンズ・ホーム(船員休息所)へ案内し、活水女学校のエリザベス・ラッセル校長ら、同施設理事会のメンバーが案内役を務めた。

一行はまた、アメリカとの深い関わりを持つ施設である米陸軍補給所も訪ねた。明治40(1907)年10月5日の夜、タフト夫妻とシドモア領事は、長崎県知事荒川義太郎主催の夕食会に招かれ、料亭「迎陽亭」において日米の友好と相互理解を深めた。

翌年11月の選挙でウィリアム・H・タフトは第27代アメリカ合衆国大統領に選出された。一方、ファーストレディのヘレン・タフトは、友人であるエリザ・シドモアの長年の悲願を遂行し、ワシントンのポトマック川河畔に東京から贈られた3千本余りのソメイヨシノを初めて植樹した。今日、これらの美しい日米友好の象徴は、毎年150万人以上の人々をアメリカの首都に引き寄せている。